

KEYWORD

データの
共通化・標準化

違う病院、違う国の間でも医療情報のやりとりをスムーズにすることを目的に、データ形式を統一すること。医薬品や病名に統一コードを用いて病院間で情報を統合するのがその一例。横井教授らは国内のデータ標準化を進めており、そのノウハウを国際標準として、海外に売り込むことを目指している。

私 たちはいつも同じドクター、同じ病院の診断・診察を受けているわけではありません。大学病院で大きな手術をしてリハビリをした後、在宅でケアしながら近くの病院に通うなんてこともよくあるケースです。そんなとき「あれっ、また同じ検査？」「普段から飲んでいる薬のこと言い忘れちゃった」なんてことがあるかも……。患者さんにとっても病院にとってもそれは大きな問題です。ムダを省きたいのはもちろんのこと、知らずに出した薬の組み合わせで副作用が起こっては大変！そんな二度手間やあつてはならない間違いをなくすべく取り組んでいるのが、香川大学医学部附属病院「医療情報部」の部長をとめる横井英人教授です。

横井教授が進めているのは、病院同士が電子紹介状などのデータをインターネットでやりとりするK・M・I・X（かがわ遠隔医療ネットワーク）、基幹病院で急性期の治療をして、地域の病院がリハビリなどを引き継ぐ……といった協力の道筋「地域連携パス」づくりなど、従来からさらに踏み込んだ活用で、いわばK・M・I・X 2.0の構築です。

データとして電子カルテという形は少し前からありましたが、情報を「標準化」して「共有」すること、それを「活用」

することは長く医療の場でハードルになっていました。

「たとえば、薬の名前の表示の仕方。実は病院ごとに異なり、統一化されていないんです。アルファベットの大文字と小文字の違いでもそれだけでコンピュータは違うものと認識します。診療情報がコンピュータ上にあるといつてもまずは共通化・標準化が必要なんです。これができると病院ごとの薬の表現が統一でき、ある病院が薬を出そうと思った時に、前の病院が出した薬を参照して相性の悪い薬が分かるようになります。」と横井教授。このプロジェクトの魅力は、この横のつながりの集合から薬の副作用をいち早く見つけ出せることにもあります。香川大学医学部附属病院は2011年度、厚労省の協力病院に選ばれ、それら10病院のデータを統合して副作用を見つけるプロジェクトにも参加しています。これによって医療の質、薬の処方などの質が上がるのは大きなメリットなのです。

ほかにも、横井教授はK・M・I・Xの可能性を探り、さまざまな展開をしています。2010年にはタイのチェンマイ大学との交流がきっかけでテレビ会議システムを使った遠隔支援も始まりました。

「タイには日本の工場が多く、日本

人が3000人ほど住んでいます。また、リタイアして老後を過ごす60〜70代の日本人も多くいます。しかし日本人医師がいなかったため、病気の時に現地の人の医師との意思疎通に不安を感じていました。これを支援しようとして、私を含め3人の医師が交代で健康相談にのっています。こういった貢献もITを使えば安く簡単にできますから」。

一般的な医師のイメージとは少し違った舞台で先端医療を突き進む横井教授。そして教授と日本にとって勝負どころなのが、このシステムを発展させた「国際標準化」です。

「情報システムで日本は決して負けていません。もっと良さを発信する努力をしなければ」。

国際規格を勝ち取ることができれば、大きなビジネスチャンスがありますが、勝ち取れなければ海外仕様に合わせるためにシステム導入の大きなコストが待っています。日本のあるべき姿は国内で確立したノウハウを世界で商品化し、願わくばそれを国際規格にすることにあり、と断言する横井教授。香川県内・国内の情報システムを整備し、同時に世界を狙う。地域と世界、今と未来の両輪を見据えた奮闘は、私たちには見えないところで熱く続いています。

情報システムの進化で
医療と日本に
新たな武器をもたらす

香川から国際規格を



横井英人

PROFILE

よこい ひでと
医学部附属病院 医療情報部
教授 医学博士
専門分野：医療情報学



中核医療と地域医療をつなぐ遠隔医療ネットワーク。地域格差のない医療体制をつくります。タイのチェンマイ大学との交流風景。テレビ会議システムを使って医療の遠隔支援を行なっています。